



Title	研究ノート 調性指導における「キー」概念の導入
Author(s)	吉田, 孝
Citation	教授学の探究, 5: 101-104
Issue Date	1987-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/13543
Type	bulletin
File Information	5_p101-104.pdf



[Instructions for use](#)

〈研究ノート〉

調性指導における「キー」概念の導入

吉 田 孝
(高知大学教育学部)

I

われわれが、ある楽曲のことを「ト長調」とか、「ハ短調」とかいう場合、それは次のようなことを意味している¹⁾。

ト長調	a	使用されている各音が全音階を構成している。
	b	主音の階名はドである。
	c	主音の絶対的な音高（音名）はト音である。
ハ短調	a	使用されている各音が全音階を構成している。
	b	主音の階名はラである。
	c	主音の絶対的な音高（音名）はハ音である。

aでいうところの全音階とは、音楽で使用される音の高さの相対的な構造の一種であり、図1のようなサークルで表すことができる。サークルの1周は1オクターブをあらわしている。オクターブをなす2音は、実際の音の高さは異なっているが、同じ種類の音として認識されるので、円周上の同じ点に位置づけることができる。円周上に示した各点は、全音階の構成音である。全音階は次のように特徴づけることができる²⁾。

ア) 1オクターブ7音からなる。

イ) オクターブ内に全音程が3回連続するところと2回連続する箇所をもち、両者の間は半音程となっている。

全音階のサークルは、回転してもその各点のすべてが元の位置と重なりあうことはない³⁾。したがって、全音階の各音には、その相対的な位置をあらわす名称をつけることができる。これが、階名である。上のト長調やハ短調のように、〇〇調という場合は、全音階を前提にしている。

bは、当該楽曲の主音が、全音階のどの位置に位置づくかということを述べたものである。これを「旋法」といい、主音の階名によって、「ド旋法」「レ旋法」、「ミ旋法」…等とあらわすことができる⁴⁾。

ただし、西洋音楽において、現在最も多く使用されているのは、ド旋法、ラ旋法である。ド旋法とラ旋法は特別な名称がつけられている。「長旋法」、「短旋法」である。その理由は、どち

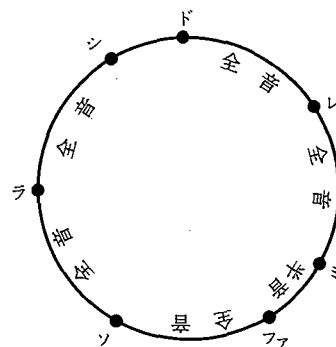


図1 全音階のモデル

らの場合も、主音、属音、下属音を根音とする三和音が、ド旋法の場合には長三和音を、ラ旋法の場合には短三和音を構成するためである⁵⁾。

cは主音の絶対的な音高を述べたものであり、これが「調」(狭義)である。

以上のことをまとめると、「調性」(広義の調)とは、①その楽曲が全音階で構成されている場合に②旋法と③調(狭義)をまとめて表現する概念であるということができる。

II

「ト長調」や「ハ短調」という言い方は、楽曲が全音階で構成されている場合にその施法と調(狭義)をまとめて表現したものである。

調性	旋法	調(狭義)
ト長調	長旋法(ド旋法)	ト調
ハ短調	短旋法(ラ旋法)	ハ調

さてこの「ト長調」や「ハ短調」なる表現には、もう1つの重要な属性が内包されている。「ハ短調」をとりあげてみる。

主音を階名でいうとラであり、音名でいうとハであるということは、階名のラが、音名のハであることをあらわしている。このことは、すなわち階名と音名の次のような対応関係を決定している。

ラーハ、シーニ、ドー変ホ、レーヘ、ミート、ファー変イ、ソー変ロ、

この階名と音名の対応関係が「キー」概念である⁶⁾。キーをあらわすのに、階名のドが音名の何と対応しているかであらわすことにする。そうすると、この場合は「変ホのキー」ということになる。ト長調の場合は「トのキー」である。階名、音名、主音を使って整理すると次のようになる。

旋法 主音と階名の関係
 調 主音と音名の関係
 キー 音名と階名の関係

ところで、旋法、調、キーの三者は、そのうち2つの属性が決定されるならば、もう一つが決定されることになる。旋法と調をいえば、キーが決定されることはすでに述べた。同様に、施法とキーをいえば、調も決定される。例えば長旋法でありホのキーであれば、ホ長調である。また、調とキーをいえば施法も決定される。ト調で変ロのキーであれば短旋法である。

このことは図2のような三重円を使えば容易に

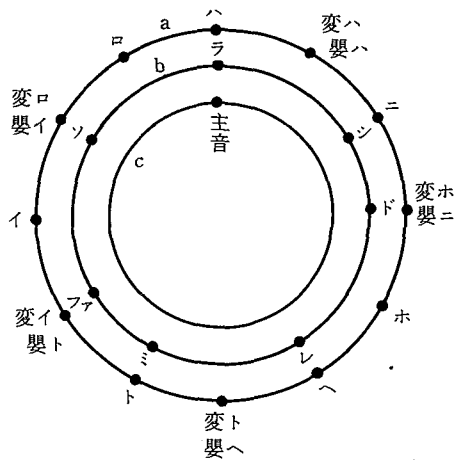


図2 調性のモデル (ハ短調の場合)

理解できる。外側の円 a を「音名サークル」、b を「階名サークル」、c を「音名サークル」と呼ぶことにする。すると、b と c の関係が旋法、a と c の関係が調、a と b の関係がキーということになる。2つの属性が決定されれば、もう一つが決定されるのがこの図から理解できるであろう。ところで、「調号」はその語感から「調をあらわす記号」として理解されがちであるが、これは正確ではない。調号には主音の位置は示されないので、旋法や調をあらわすことはない。正確には、いかなるキーになっても譜表が全音階になるように保持するための記号であり、その意味では「キーをあらわす記号」なのである。実際に調号を見ただけでわかるのは、階名と音名の対応関係、すなわち「キー」なのである。

III

調性（広義の調）を表現する場合、「ト長調」、「ハ短調」のように、旋法と調を同時に表現する習慣のために、また、旋法と調を表現すれば自明のことであるがゆえに、キーという概念はこれまでほとんどかえりみられることがなかったし、また一つの独立した概念として指導されることもなかった。すなわち「ト長調」、「ハ短調」の結果として「トの音がド」、「ハの音がラ（すなわち変ホの音がド）」というようにとらえられてきたのである。

筆者はこれとは逆に、このキーの概念を独立して指導し、それを旋法や調と結合して調性に結びつけるほうが有効であると考えている。その理由は次のとおりである。

①キー概念の理解のほうが、旋法や調の理解よりも容易である。すなわち楽譜の調号の位置をみれば、キーはただちに理解できるのである。キーを理解するためには、次の規則があれば十分である⁷⁾。

読みの規則	シャープはシ、フラットはファ
書く規則	シャープはファ、フラットはシ

②キーを理解することによって、階名唱法（移動ド）唱法が容易になる。キーをわかりさえすれば、楽譜上のドレミファソラシの位置はすぐにわかる。実際に楽譜を読みこなすには、もちろん一定の訓練を必要とするが、キーの導入はその助けになるのである。

③キーから入ることによって、旋法の理解もより容易になる。楽譜上のドレミファソラシドの位置がわかれば、その主音の位置によって旋法もただちに理解できる。その場合、長短の両旋法にとどまらず、レ旋法、ミ旋法等の各種の旋法をも内容として導入することが可能となる。

④調に関する誤った理解は、特に短旋法の場合に多くみられる。例えば、「イ短調」と「ハ短調」を混同したり、「ニ短調」と「ヘ短調」を混同する等である。これは、キーと調の混同である。こうした混同は、キーを意識化させることによって逆に克服されるであろう。

以上にもとづいて筆者は、調性指導のプランを作成し実施している。現在全部が終了していないので、その結果については稿を改めて報告することにした。

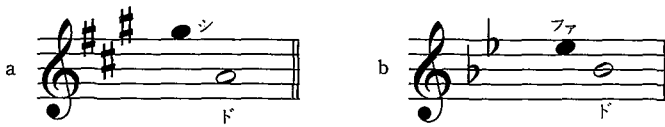
〈注〉

- 1) 本論で、「ドレミ」を全音階における、相対的音高を示す階名として使用している。
- 2) 音階をサークルで表す案は、島岡謙編『音楽の理論と実習』音楽之友社（1982）に学んだ。
- 3) この点は次のようなことを意味している。かりに半音音階（12音音階）をサークルに示すと、半音音階

の各音を表す各点は、サークルを12等分することになる。このサークルを30度回転させると、各点がもとの点と重なりあう。この場合には、各点に名称をつけることができないのである。すなわち、半音音階には基準になる音が存在しえないのである。逆に全音階の場合には、回転させてももとの位置を指摘できるので、各音に名称をつけることができるのである。

- 4) 「ド旋法」、「レ旋法」、「ミ旋法」という言い方は、その旋法の性格を平易に表すものであり、実際にはそれぞれに固有の名称がつけられていた。例えば、教会旋法では「イオニア」、「ドリリア」、「リディア」等である。
- 5) ド旋法とラ旋法が現代に残ったのは、和声の発展と結びついている。ド旋法やラ旋法が和声にとって、非常に都合のよい旋法であったために現代に残ったのである。
- 6) この概念を東川清一は中国語にならって「均」と呼んでいるが、「キー」のほうが、「キーが高い」といった日常的用語と結びつけやすいのでこちらを採用した。東川清一「階名と音楽理論」(日本音楽教育学会第16回総会, 1985)
- 7) この規則は次のように使われる。

読みの規則



①右端のシャープの位置に注目する。②シャープであればそこがシ、フラットであればそこがファ②したがって、aはイのキー、bは変ロのキー

書く規則(シャープやフラットをふやす)

①シャープはファの位置に、フラットはシの位置に②上のa、bにシャープ、フラットをふやすと、aはホのキーに、bは変ホのキーになる。

